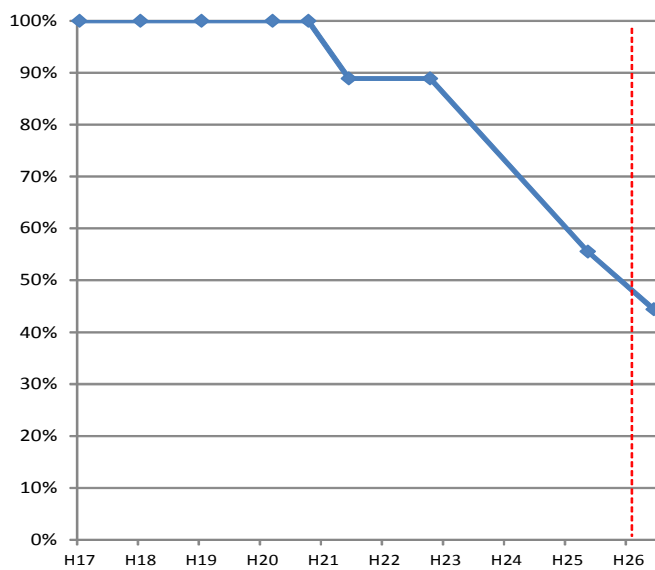


樹種名	ネズミモチ（別名：タマツバキ）		
科 目	モクセイ科		
学 名	<i>Ligustrum japonicum</i>		
分 布	日本では本州・四国・九州・琉球列島に広く見られ、国外では台湾と中国に分布する。低地や低山の日向に生える。		
樹木特性	照葉樹林における代表的な陽樹であり、森林内の開けたところや山火事のあとなどに多数見られる。		
用 途	公園樹として利用。		
植栽本数/面積 （植栽密度）	9 本 （他樹種との混植）		
特 徴	【樹 形】 常緑低木で樹高は 2~3m になる。よく横枝を出して、塊状の樹形になる。茎は灰褐色をしており、その表面に多数の粒状の皮目が出るのが特徴。葉ははっきりと対生し、長さ 4~8cm、楕円形から広卵状楕円形、厚手での上向きとしており、表面にはつやがある。葉柄は長さ 5~12mm、紫色を帯びることが多い。 花は 6 月頃に咲く。花序は円錐形で、枝先に出て長さ 5~12cm、多数の花をつける。花は経 5~6mm、花冠は白で、中程まで四つに割れ、それぞれが反り返る。雄しべはこの花冠の裂け目の内の対面する二つのところから出て、花冠の裂片くらいの長さがまっすぐに突き出る。花序が多数出するため、木全体に真っ白の花の塊が散らばったようになり、遠目にもよく目立つ。また、ハナムグリなどもよく集まる。 果実は長さ 8~10mm の棒状に近い楕円形で、はじめ緑、後に表面に粉を吹いて黒く熟する。街路樹や生け垣として利用される。		 
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後 4 年を超えたあたりから枯死が見られ、現存率は 44 %となった。枯死の原因は明確ではないが、林内の照度が低下したことも要因のひとつと考えられる。9 年を経過した平均樹高が 2m 程度と成長量は大きくはないが良好に生育している。		
被 害	特になし。		

ネズミモチ 現存率



【現存率】

植栽後 4 年以降に枯死が発生した。林内の照度が低下したことによるものと推測されるが、特定はできていない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 44.4%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

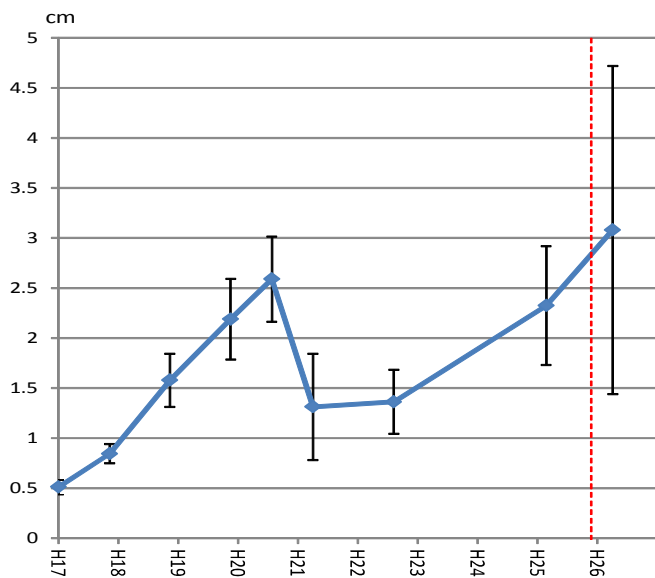
現存木の成長は良好である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 3.08 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ネズミモチ 根元・胸高直径



【樹 高】

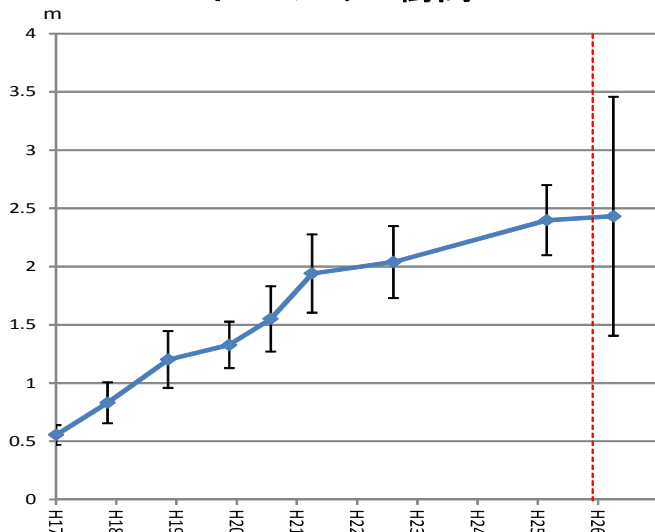
現存木の成長は良好である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 2.43m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



ネズミモチ 樹高



《プチ情報》

モクセイ科の中で同様に利用されている種として、フロクロモチとトウネズミモチがある。

フロクロモチ var. *rotundifolium* は葉が丸くなり、枝が詰まり園芸品である。

中国原産のトウネズミモチは非常によく似ているうえ、あちこちで栽培されることが多いため、混乱を生じている。葉を裏から日にかざして見ると、本種は葉脈が透けて見えない（トウネズミモチは葉脈が透けて見える）。

また、本種の果実は楕円形である（トウネズミモチの果実は球形に近い）。

この他、日本では同属にイボタノキなどがあり、似たような場所に生えるものもあるが、ほとんどは落葉性であり、この種のような厚ぼったい葉を持つものではないため、区別は簡単である。

和名は、果実がネズミの糞に、葉がモチノキに似ていることから付いた。暖地に自生するとともに、公園などに植えられている。「タマツバキ」の別称も用いられる。